



令和3年度 保護者・生徒・地域の皆さんへ  
**長野高等学校 学校長だより**  
(「学校長だより」はホームページにも掲載しています。)

令和4年  
No 18  
3月28日(月)

(今号は、1・2年生徒と保護者にメールのみで配信です)

## 新たなチャレンジをした生徒の皆さんです。

### ①「長野県高校生模擬裁判選手権」に出場しました。

3月5日(土)に標記の大会が開催されました。刑事事件を素材として、参加高校生が検察官・弁護人の立場になって、証人尋問・被告人質問・論告弁論を行う中で、物事のとらえ方やそれを表現する方法を学び、刑事手続の意味や刑事裁判の原則を理解することを目的としています。1年生に呼びかけたところ6名の皆さんが参加しました。1月下旬からオンラインを含めて計5回も現役の検察官・裁判官・弁護士さんから対面やオンラインでご指導いただきました。

参加した**6組中村朱里**さんは「参加した動機は6人それぞれですが、私は法学部への進学を考えていますが、まだ漠然としているので、法律を使う具体的な裁判の場を見た方がいいと思い参加しました。私は検察役でしたが、証拠を探すために事実と事実を結びつけていく作業が難しかったですし、同じ検察役の仲間3人の中でも見解が分かれるなど苦労しました。裁判当日は証人尋問などで想定外の陳述があると論告も書き直さなければならないので、そこがドキドキしたり、難しさだったり、面白さでもありました。参加してみて、模擬裁判でも有罪を導くのに理論的な矛盾はないか、など自分は重圧を感じましたが、これが本当の裁判であれば有罪・無罪を決める重大な責任があるので、司法・法曹の役割は本当に重いものだと思います。」と話してくれました。

全国大会には今まで上田高校が参加していましたが、長野地方裁判所が中心となって他校にも呼びかけ、今年初めて上田・深志・長野の3校で長野県選手権を開催したものです。実際に県代表を選ぶ大会は5月に実施されます。



第1回目の指導の様子。弁護士などの法曹関係者9名の皆さんに来校頂き、説明等して頂きました。



模擬裁判当日の様子。3校と長野地方裁判所を結びオンラインで開催。本校は大会議室から参加しました。

### ②「地学オリンピック(全国大会)」に出場しました。

3月13～15日(火)の3日間、茨城県つくば市で第14回日本地学オリンピックの本選が行われました。全国の参加者1,582名のうち1次予選・2次予選を通過した65名がこの本選に出場しました。本校の**天文・地球科学班の2年中村明日歌**さんもその一人です。この大会で最終的に4名が日本代表に選ばれます。1日目は開会式、気鋭の若手研究者(3名)からのレクチャー、2日目は2時間45分の試験(化石鑑定を含む)、産業技術総合研究所の見学、過去の地学オリンピック出場者との交流会、3日目はつくば市内



本選に出場した中村明日歌さん

の地学ポイントを解説してもらいながら見学するジオ散歩、表彰式、金賞入賞者10名による代表選抜、という日程です。灘・開成・麻布・海城などの高校や、女子は7名が出場していましたが横浜翠嵐・桜蔭・大阪教育大付属・金沢泉丘などの生徒さんだったそうです。

中村さんのコメント「参加できてとても楽しかったです。もともと地学には興味はありましたが1年前にこれだけ真面目に勉強することになるとは想像していませんでした。今では普段見る景色も違って見えます。参加している人たちは皆さん断層を見て大興奮している個性豊かな人たちでした。私は2年の秋から本格的な勉強を始めましたが、この大会で賞を取るために1年から参加したほうが良いと思います。また、理系の人にとって地学は興味ないかもしれませんが、本校には井手先生という強い味方もいることだし、地学での受験を考えてみてもいいのかな、とも思いました。」

顧問の井手先生のコメント「天文・地球科学班の活動の一環として、今年度は全員で地学オリンピックを目指しました。彼女が二次予選を通過して本選にコマを進めることが決まった日から、私も本選の過去問と向き合う日々でした。各分野の専門家が作る問題は地学現象の示唆に富んでいて、私自身もあらためて地学の面白さを感じました。これから毎年、地学オリンピックに出場する常連校を目指します。」



本選の試験が行われた会場



ジオ散歩の様子

## コロナ禍を通じて「対面授業」の意義を考える

「コロナ感染症は、今まで社会の中に存在した様々な問題を顕在化し、拡大した」という事がよく言われます。感染症への対応が3年目となり、その間「オンライン」という新たな手段を私たちは手に入れました。特に本校の場合は、オンラインが非常にスムーズに運営できるようになったからこそ、余計に「対面授業」や「学校に集まること」の意味を考えさせられました。オンラインがうまくできることによって、知識伝達はオンラインでも、ある程度可能なことが体感できてしまったわけです。

コロナ禍に見舞われる以前からも「知識伝達だけの授業」・「チョーク&トークだけの授業」から転換する必要がある、と言われ続けてきましたが、その課題が本当に目の前にやってきた、という感触です。「先生が居て、友達が居て」という「対面授業」でしかできないことは何か!? だからこそ、できることは何か!? 教育に携わる者として考えさせられただけではなく、その回答を実践していく必要があります。もちろん、「知識伝達」や「チョーク&トーク」がなくなるわけではなく、上記にアンダーラインを引いていますが「だけ」ではまずいということです。

すでにこのような課題を意識した授業実践を多くの授業で行っていますが、生徒の皆さんと先生方が作り上げる授業が、知的好奇心を満たし、学ぶことの意欲につながるものになるように、今後も努力していきたいと考えています。

